祖国オーストリアはどこにあるのか

── ヨーゼフ・ロート『ラデツキー行進曲』に見られる オーストリアの様相

小原　森生

1. はじめに

Adolf D. Klarmann はヨーゼフ・ロートの作品において「一元的で，有機的に一体となったオーストリア像を想定するのは間違った前提であり」，「むしろ終焉を目指して進む帝国の像が見える」[1)]と指摘している。しかし，ロートの代表作『ラデツキー行進曲』[2)]（1932）においては様々な異なる要素がどれもオーストリア的に見える。作中における Entfremdung や Heimatlosigkeit のモチーフを指摘している研究もある[3)]が，これらの孤立したモチーフはそれぞれどれもオーストリアの表象であるといえるだろう。本稿ではオーストリア／オーストリア人のアイデンティティを巡る問題を確認した後に，作中に見られるオーストリアの表象を分析し，それらが互いに矛盾し合うものでありつつ，全体としてオーストリアを形作っていることを明らかにする。また，個々の要素それ自体がすでに矛盾を孕んでいる存在であることにも着目し，矛盾こそがオーストリアを特徴づけるアイデンティティである可能性についても検討する。

---

1) Adolf D. Klarmann: Das Österreichbild im »Radetzkymarsch«. In: David Bronsen (Hrsg.): Joseph Roth und die Tradition. Darmstadt: Agora 1975, S. 153-162, hier S. 153.

2) テクストとして Joseph Roth: Radetzkymarsch. In: Joseph Roth Werke Bd. 5. Romane und Erzählungen, 1930-1936. Hrsg. und mit einem Nachwort von Fritz Hackert. Köln: Kiepenheuer & Witsch 1990 を使用する。以下，同書からの引用は頁数のみ示す。また，平田達治訳『ラデツキー行進曲（上・下）』（岩波書店，2014 年）を適宜参照した。

3) 例えば，Martha Wörsching: Die rückwärts gewandte Utopie. Sozialpsychologische Anmerkungen zu Joseph Roths Roman »Radetzkymarsch«. In: Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.): Joseph Roth. Edition Text. München: Edition Text + Kritik 1982, S. 90-100.

2. オーストリア／オーストリア人の曖昧なアイデンティティ

「オーストリアなるもの」が曖昧な存在であることは頻繁に議論の対象となる。19世紀にナショナリズムが台頭し，周辺諸国では国民国家の建設が進む中，オーストリア帝国（1867年からはオーストリア＝ハンガリー帝国）は依然として多民族帝国という形態を維持した[4)]。オーストリアはロシア，オスマン帝国とともに国民国家の対極に位置する多民族帝国であった[5)]。オーストリア帝国はナショナリズムの高まりの中で次第にその存在意義に疑問を持たれるようになった。帝国の中心民族であったドイツ人の中にさえオーストリア帝国よりもドイツ帝国の同胞たちに思いを馳せる者たちがいたほどである[6)]。

オーストリアという存在の曖昧さは例えば二重帝国を構成する両地域の名称にも表れている。1867年に「アウスグライヒ」が成立し，ハンガリー人の自治が認められると，帝国はオーストリア＝ハンガリー帝国（Österreichisch-Ungarische Monarchie）へと再編された。この二重体制はアイデンティティ上の問題をはらんでいた。帝国の東半分はハンガリー王国として明確なアイデンティティを持っていた。一方，西半分「非ハンガリー」の位置づけは曖昧であった[7)]。この地域は「帝国議会に代表される諸王国と諸邦」（Im Reichsrathe vertretene Königreiche und Länder）という名称を持っていたが，この地域は厳密にはオーストリアとは同一視されなかった。建前上，オーストリアは引き続き帝国全体を意味しており，「帝国議会に代表される諸王国と諸邦」は1915年まで「オーストリア」の名称を与えられることはなかった[8)]。これは帝国の西半分がオ

4) 歴史家のHugh Seton-Watsonは「歴史的連続性を持つヨーロッパの民族（the old, continuous nations of Europe）」について言及しているが，そこではオーストリアは言及されていない。Hugh Seton-Watson: Nations and states: an enquiry into the origins of nations and the politics of nationalism. London: Methuen 1977, S. 15-88.

5) Ebd., S. 140-149.

6) Erich Zöllner: The Germans as an Integrating and Disintegrating Force. In: Austrian History Yearbook, 3/1 (1967), S. 201-233, hier S. 227.

7) スティーヴン・ベラー（坂井榮八郎監訳，川瀬美保訳）『フランツ・ヨーゼフとハプスブルク帝国』（刀水書房，2001年），114-115頁。ただし，ハンガリー王国もまたマジャール人による純粋な国民国家だったわけではない。ハンガリー王国内部でもルーマニア人やクロアチア人が自治を求め，1868年にはクロアチア人が妥協（ナゴドバ）によってある程度の自治権を手にした。同書，120頁。

8) 阿南大「ハプスブルク君主国における「中欧」地域概念の形成史（1648――1918）――複合国家像と国制改革案における「二元的二元主義」の刻印――」『東洋学園大学紀要』23（2015年，55-70頁），67-68頁。

ーストリアに相当するかという議論である。オーストリアとはどの地域を指す語なのだろうか。ハンガリーをも含む帝国全体，帝国の西半分，ドイツ語地域など，対応する地域を複数挙げることはできるが，言い換えればそれはオーストリアという概念が未だに明確には定まっていなかったことを意味する。帝国末期にはカール・レンナー（後の第一共和国首相，第二共和国大統領）やアウレル・ポポヴィッチなどの法学者が帝国の再編を提案するなど，オーストリアの国家機構を定めようとする試みがあり，フーゴ・フォン・ホーフマンスタールなどもオーストリアのアイデンティティを追求するエッセイを発表している。しかしこのこと自体，オーストリアがアイデンティティを巡り揺れ動いていたことの表れであると言えるのではないだろうか。

第一次世界大戦が終結し，オーストリア＝ハンガリー帝国が解体されると，オーストリアやオーストリア人のアイデンティティは更なる危機にさらされる。旧帝国のドイツ人地域は，当初「ドイツ・オーストリア共和国（Republik Deutschösterreich）」を名乗り，自らを新生の「ドイツ共和国の一構成体（ein Bestandteil der Deutschen Republik）」であると規定した。しかし，1919 年のサン＝ジェルマン条約によってドイツとオーストリアの合邦が禁止されると，いまやアルプスの小国となったオーストリアのアイデンティティ問題はいよいよ深刻なものとなった[9)]。

オーストリアとはハプスブルク家によって束ねられる諸民族の総称でしかなく，それ自体では何の意味も持たない存在だったのだろうか[10)]。オーストリア帝国はオーストリア民族によって成り立つ国家などではなく，そのような民族による国民国家の成

9) フランスの首相ジョルジュ・クレマンソーはこのような形で成立したオーストリア共和国について「オーストリアは余りものにすぎない」と述べた。Hellmut Andics: Der Staat, den keiner wollte. Österreich von der Gründung der Republik bis zur Moskauer Deklaration. Wien / München: Molden-Taschenbuch-Verlag 1976, S. 11.

10) トロツキーはロシア帝国とオーストリア＝ハンガリー帝国を比較し，前者については「ツァーリズムとはけっして同一ではない。ツァーリズムの破壊はロシアの解体を意味しない。」，後者については「国家組織として，それはハプスブルク君主制と同一である。……オーストリア＝ハンガリーは，ハプスブルク家とともに生まれ滅びる。」と評している。トロツキー（西島栄・早川潤訳）『戦争とインターナショナル』（柘植書房，1991 年），50-51 頁。一方でロートは後述するように，オーストリア国家と皇帝・王朝を区別していた可能性がある。いわば，トロツキーとロートは同じ思想をそれぞれロシア帝国とオーストリア＝ハンガリー帝国に適用しているように思われる。両者はウクライナ人地域に生まれたユダヤ系住民という共通点がある。なお，ロートは，トロツキーの運命（特に彼の失脚後）に興味を持ち，小説『沈黙の預言者』ではトロツキーをモデルにした T という人物を登場させている。David Bronsen: Joseph Roth: Eine Biographie. Köln: Kiepenheuer & Witsch 1974, S. 321f.

立は不可能だったのだろうか。その問いは戦間期に多数の文学作品が書かれた土壌となり，また 1938 年にはドイツによる併合を招き，今なお議論の的であり続けている。

3. ロートのオーストリア観

言語によるネイションの定義が進む中,「オーストリア」がその核となることは困難だった。しかし前述の通り，オーストリアが敗戦後「オーストリア的国家として」の歴史を歩むことを余儀なくされる[11)]以前から，そのアイデンティティを探る動きは存在した。1907 年に出版されたオットー・バウアーの『民族問題と社会民主主義』はオーストリア史を中世にまでさかのぼり，オーストリアがドイツ連邦から排除されたのは必然であったと論じている[12)]。また，帝国内のドイツ人・チェコ人の双方から攻撃の対象とされたユダヤ人は対立する諸民族のあいだを媒介する「オーストリアの真のオーストリア人」であるというアイデンティティを持つようになった[13)]。

では，オーストリア人とはユダヤ人の言い換えを意味するのであろうか。確かにユダヤ人を「オーストリア民族」と見なすことは理論上可能かもしれない。しかし，もしこの考え方を肯定するのであれば，オーストリアとはユダヤ人によるユダヤ人国家であるということになる。これは歴史的経緯から考えても整合性があるとは言えないだろう[14)]。また，オーストリアの文化や政治を牽引したユダヤ人たちの多くはドイツ化した同化ユダヤ人である。彼らが志向したオーストリア・アイデンティティにユダヤ性がどれほど表れているのかは疑問の余地がある。更に，彼らの多くはウィーンを中心としたドイツ人地域（現在のオーストリア共和国の範囲にほぼ相当）の出身である。彼らの主張する「オーストリア性」が帝都であるウィーンと同一視される可能性

11) この表現は当然，矛盾である。しかし,「オーストリアとは何か」という問いに答えが出ぬまま「オーストリア国家」であることを背負わされた第一共和国がアイデンティティ危機に陥った歴史を考えれば，決して的外れとは言えないだろう。すでに述べた通り，ドイツ・オーストリア共和国は当初自らをオーストリアというよりもむしろドイツとして定義しようとしたほどである。

12) オットー・バウアー（丸山敬一［他］訳）『民族問題と社会民主主義』（御茶の水書房，2001 年），176 頁。

13) 野村真理「ウィーンのユダヤ人：同化と異化のはざまで (2001 年度歴史学研究会大会報告 民衆の生きた 20 世紀) : (近代史部会 都市における移住者の世界：戦間期の社会変容と国民化)」『歴史学研究』755（2001 年，125-134 頁），129 頁。

14) オーストリアが歴史の表舞台に躍り出たのは, 何よりも神聖ローマ帝国におけるハプスブルク家の地位上昇を契機としており，その意味ではオーストリアにおけるドイツ的要素を無視することはできないだろう。また，ユダヤ人はヨーロッパ各国で特殊な立ち位置を占めた民族であり，それはオーストリアに限った話ではない。

は否めず，裏を返せばウィーンらしさがオーストリア全体を代表すると錯覚させる恐れも孕んでいる。

あくまで「言い換え」ではない「オーストリア性」というものは存在するのだろうか。戦間期に活躍した作家ヨーゼフ・ロートは「オーストリア」を強く意識した「真のオーストリア人」に近い存在と呼べるかもしれない。ロートはユダヤ人ではあったが，ホーフマンスタールやツヴァイクとは違い，帝国の周辺地域であるガリツィアの出身であった。彼は小説『皇帝廟』において「オーストリアの本質は中心ではなく，周辺にあるのだ。……オーストリアはアルプス山脈の中に見出すことはできない。」[15] と登場人物に語らせているように，オーストリア・アイデンティティをウィーンに求めてはいなかった。オーストリアへの想いを強く持っていたロートが抱いたオーストリア像とはドイツ性やユダヤ人性の「言い換え」ではなく，それ自体が強い個性を持つものであった[16]。彼の代表作である『ラデツキー行進曲』には独特なオーストリア像が描かれている。それは，宗教や言語として表現される一方で，必ずしもそれらに換言できるわけではない帝国時代のオーストリア像であり，まさに「真のオーストリア人」ロートが感じ取った「オーストリアそれ自体」であった。

4. 『ラデツキー行進曲』中の「オーストリア」

『ラデツキー行進曲』の中には「オーストリア」として描かれているような諸要素が見られ，それらが互いに矛盾し合うことで「オーストリア」を作り上げている。本稿では作中の「モラヴィア」「ガリツィア」「軍隊」「ジポーリエ」「皇帝」について検討する。

4.1. モラヴィア

モラヴィアはチェコ語地域で，オーストリア＝ハンガリー帝国の一州であった。『ラデツキー行進曲』の主要な舞台として登場するW市は主人公カール・ヨーゼフ・フォン・トロッタ少尉の父フランツが郡長（Bezirkshauptmann）を務める地であり，モラヴィア州に置かれている。

郡長はW市における皇帝の代理である。この小説のタイトルであるラデツキー行進

15) 平田達治・佐藤康彦訳『ヨーゼフ・ロート小説集4』（鳥影社，1997年，5-201頁），21頁。
16) もちろん，ロートがユダヤ人であったこととオーストリアへの強い想いの間にはつながりが認められる。『放浪のユダヤ人』を始め彼の作品はユダヤ人への言及が多い。しかし，彼が思い描くオーストリア／オーストリア人は基本的にユダヤ性とは同一視されていない。

曲は郡長の公邸の前で演奏される。帝国の支配はこのチェコ人地域にも及んでいる。

> 師団の全管轄圏内において，モラヴィアの小さな郡庁所在地 W 市にある第 10 歩兵連隊の軍楽隊ほどすばらしい軍楽隊は存在しなかった。……あらゆる野外演奏会――それは郡長殿のバルコニーの下で行われた――はラデツキー行進曲で始まった。(156)

また，帝位継承者のフランツ・フェルディナント大公が暗殺され，帝国の崩壊が予想されている終盤でも，日曜日にラデツキー行進曲が演奏される W 市は「週に一度，日曜日にはオーストリアが健在だった」(424) と記述されており，この町がオーストリア的であることを確認できる。
しかし，それは必ずしもこのモラヴィアの地にウィーンのミニチュア版が存在しているという意味ではない。それは例えば地元の有力者フォン・ヴィンターニク氏の描写に表れている。

> 時々，フォン・ヴィンターニク氏を散歩に連れて行く 2 頭立て馬車が，広い通りを北から南へ，この地主の城から広大な狩場へと，蹄の音を立てながら走っていった。……街の住人たちは彼に挨拶した。彼はそれに応えなかった。彼は身動ぎせず，挨拶の海を抜けていった。(157)

フォン・ヴィンターニク氏がどのような立場の人物であるのか作中では詳しく説明はされていないが，城や広大な狩猟場を所有していることから，地元に根を下ろし一定の影響力を持つ有力者ではないかと思われる[17]。
　対する郡長は地元の人間ではなく，皇帝の代理を務めるとはいえ，その権力基盤を国家機構に依存する官僚にすぎない。更に，作中には郡長とは別に W 市の市長も登場する。中央権力が地元権力と拮抗[18]するこのモラヴィアの町の風景はウィーンのそれとは異なっている。このスラヴの辺境の地は一見すると「オーストリア的」ではない。

17) ロートの別の小説『皇帝の胸像』にも地主が登場する。「ロパティーニ村の人々にとって，『伯爵』とは単なる貴族の称号のようなものではなく，非常に高位の官職名でもあるように思われた。……彼は実際のところ，国家が意図していない官庁であった。」Joseph Roth Werke Bd. 5, S. 657f. したがって，彼は国家の官職によってではなく，自身の土地との結びつきによって権力を保持していると言えるだろう。
18) ただし，作中で郡長と市長の間に対立関係は見られない。

だが，それにもかかわらずW市の風景からは「オーストリア的な」雰囲気が漂う[19]。これは，ウィーンやその他の地域とは全く関係のない風景がそのままオーストリアになるということを意味していると言えよう。オーストリアはどこにでも存在するのであり[20]，裏を返せば（極端な言い方ではあるが），これといってオーストリア的には見えない要素の中にもオーストリアは存在するのである。

4.2. ガリツィア

ガリツィアはオーストリア＝ハンガリー帝国の辺境に位置し，ロシア帝国と国境を接していた。主人公カール・ヨーゼフ・フォン・トロッタ少尉の異動先であるB市はガリツィアに実在するブロディをモデルとしている[21]。この辺境の地から見えてくるオーストリア像はモラヴィアにおけるそれとは大きく異なっている。作者ロートはガリツィアの異様な様子を殊更に強調している。

> この土地の人々は沼地に生まれついていた。というのも，沼地がこの地の全面に，国道の両側に不気味に広がっていたからである。そこには蛙や熱病の病原菌や，何も知らず土地に不案内な旅人を恐ろしい死へと誘う悪意に満ちた草がひそんでいた。多くの人が命を落としたが，彼らの助けを求める叫び声を聞いた者は誰もいなかった。しかし，その土地に生まれた者は皆，沼地の悪意を知っており，彼

19)「ロートは，エーブナー＝エッシェンバッハやザール，いやむしろフランツォースやザッハー＝マゾッホの小説の後継者である。」クラウディオ・マグリス（鈴木隆雄［他］訳）『オーストリア文学とハプスブルク神話』（水声社，1990年），369頁。エーブナー＝エッシェンバッハについて，マグリスは次のように述べている。「この閨秀作家の小説は，帝国の遥かな広がりを伝えてくれる。その広がりは，モラヴィア地方に始まり，ガリチア地方にまで達し，さらに……遠方のジーベンビュルゲン地方に及んでいる。」同書，229頁。

20) ロートの『皇帝の胸像』では次のように述べられている。「彼はどのようなしるしに基づいてあの民族に属しているとか，この民族に属しているなどと決めたというのだろう？……まさにオーストリア＝ハンガリー帝国は色とりどりの世界の似姿であり，それゆえにこの帝国こそが伯爵の唯一の故郷だった。」Joseph Roth Werke Bd. 5, S. 655f. したがって，オーストリアとは特定の「土着性」に基づくものではないとロートが考えていたことが分かる。『放浪のユダヤ人』では「先祖とは言語，文化，宗教のどの点でも大して共通するものを持たない人々ですら，自らの血と意志によって，『ユダヤ民族』であることを表明する」（平田達治訳『放浪のユダヤ人とエッセイ二篇』（鳥影社，2009年，5-137頁），12-13頁。）と述べている。

21) この町はロートの出身地でもある。

ら自身もいくらかの悪意を持っていた。(258)

前項で指摘した通り，W 市はフォン・ヴィンターニク氏のように国家機構とは関係の薄い人物が権威を持ってはいるものの，皇帝の名代である郡長の権威が確立されており，ラデツキー行進曲が流れるような土地である。基本的には帝国の支配が及んでいる場所と言えるだろう。しかし，B 市の強烈な遠心性はあらゆるものを土着化し，それらを帝国の影響から引きはがそうとする。

同僚たちは，たいていが市民階級でドイツ系の出自を持っていたが，もう何年もこの駐屯地で暮らしており，そこに土着化し，その手に落ちていた。故郷のしきたりや，ここでは公用語となった母語のドイツ語から切り離され，沼地のどこまでも慰めのない有り様に引き渡され，賭け事や，この地で生産され，「90 度」という名で売られていた強い火酒の虜になっていた。(261)

ハプスブルク王朝の支配を各地で体現する軍隊ですら，ガリツィアの地ではその性格を歪められてしまう。ガリツィアの描写では，酒と賭博に溺れ退廃しきった軍人たちの生活が目立つ。将校たちの多くが軍の提供する兵舎ではなく，ホテルに暮らしていることも，彼らの土着化を強く示唆する[22)]。ガリツィアは完全に閉ざされた世界を形成しているのだ[23)]。

しかしその一方で，この土地はスケールの大きな広がりも感じさせる。ガリツィアで行われている商取引には世界中の様々な場所が関わっている。

彼らは……中国茶，南国の果物，……イタリアの大理石，かつらを作るために中国から取り寄せた人間の頭髪，……マンチェスターの織物，ブリュッセルのレースやモスクワのオーバーシューズ，ウィーンのリンネル，ボヘミアの鉛を売買していた。世界に豊富にある素晴らしい商品や安い商品でこの地域の商人や仲介業

22) 第 9 章にはカール・ヨーゼフが，町で一番高い建物であるホテルから町を見下ろす場面が出てくる（260）。彼の目に入ってくる風景の中には兵営の上にはためく帝国旗も含まれている。あくまで民間の施設にすぎないホテルが軍隊や王朝よりも「上」の存在であることがほのめかされているといえよう。

23) 156.

者になじみのないものなどなかった。(257f.)

彼らの中には，人間，すなわち生きている人間を売買している者たちもいた。彼らはロシア軍の脱走兵をアメリカ合衆国へ，農家の若い娘たちをブラジルやアルゼンチンに送っていた。彼らは船会社の代理店や外国の売春宿の取次店を運営していた。(258)

このような描写からは，国境地帯であるがゆえに監視の目をかいくぐり，帝国内の諸地域よりもむしろ外国との強いつながりを持つ様子が想定される。

このような特徴を示すガリツィアにはホイニツキ伯爵という大富豪が住んでいる。彼はこの地で最も金持ちの地主である。それは決してW市の郡長のような皇帝の代理を意味するのではなく，文字通りこの土地を自由自在にコントロールできる支配者に他ならない。彼の影響力の大きさは，選挙で対立候補を金や権力で打ち破り，必ず帝国議会議員に選出されるほどである。B市はまさにホイニツキの王国であり，帝国すなわち「オーストリア」を排除した空間である。

だが，ホイニツキは自らを真のオーストリア人と自負しており，帝国内で勃興しつつあるナショナリズムには懐疑的である。特定の民族への帰属を意識していないという点では，カール・ヨーゼフ・フォン・トロッタとホイニツキは民族を超越したオーストリア人であるという共通項がある。とはいえ，両者のアイデンティティのあり方は必ずしも同一のものではない[24]。ホイニツキは自らの土地に力の源泉を持つオーストリア人であるが，カール・ヨーゼフはオーストリア人であるがゆえに故郷と呼べる土地がなく，故郷を求めてむしろ「オーストリア」から距離を置こうとしている。二人はまるで鏡に映った像のように対称的だ。彼らを構成する要素はよく似ているが，その方向性が正反対である。両者はあくまで似て非なる別物なのか，それともやはり同一の存在なのだろうか。そして，そのどちらかを「実像」，もう片方を「虚像」と断じることはできない。どちらも真のオーストリア人である。ここにもまた矛盾を孕むオーストリア像が浮かび上がってくる。

ガリツィアに見られるのはオーストリアによる引力と，そこから離れようとする遠心力の均衡である。ガリツィアは18世紀にオーストリアに組み込まれることでその一

24) ホイニツキは作中ポーランド人であるという言及があるが(263)，そのことが強調されたり，大きな意味を持つことはない。カール・ヨーゼフはスロヴェニアの農民の血を引くが，すでに曾祖父の代でその伝統からは切り離されている。

部となった。そして，まさにオーストリアとなったがゆえに，その辺境としての性質――オーストリアを「否定」する力――を帯びることにもなる。

様々な民族が暮らし，世界的スケールを持った取引がなされるこの国境地帯はルテニア人農民が暮らす閉鎖的な田舎の地というよりは，むしろ非常にオーストリア的であり，そのものであると見ることができる。しかし同時に，このような闇取引はその地がオーストリア国家の統制をかいくぐることで成り立ってもいる。オーストリアであろうとしつつ，そうではない方向に向かう力が働くガリツィアは，その矛盾ゆえにやはりオーストリアを表すかのように描かれている。

4.3. 軍隊

オーストリアの複合的な性格の一部を成しているのは，民族や言語，土地などのエスニックな要素だけではない。軍隊もまた重要な要素の一つであり，これまでの例に漏れず矛盾に満ちている。官僚制と並んで近代国家の成立に不可欠である軍隊はオーストリアにおいても帝国の紐帯，シンボル的存在として機能していた。だが，オーストリア軍は19世紀後半以降の主要な戦闘では勝利を収めていない。ソルフェリーノの戦いを契機にトロッタ家は英雄の一族としての栄光を手にするが，オーストリア帝国はこの戦闘自体には敗北している[25)]。この小説のタイトルは1848年革命の際にイタリア戦線で活躍したヨーゼフ・ラデツキー将軍を讃えた曲にちなんでいるが，物語の開始時にラデツキーはすでに故人であり，彼の華々しい勝利がオーストリア史で繰り返されることはなかった。また，1866年のケーニヒグレーツの戦いでプロイセンに敗北して以来，オーストリアはほとんど戦闘を経験しておらず，作中でも軍人たちは演習ばかり行っている[26)]。平和な時代における軍隊の軍事的意義は薄れており，その存在は自己目的化している[27)]。作中の――そしておそらく現実においても――軍隊は矛盾

25) 帝国崩壊後, 1840年代末や50年代が帝国の終わりの始まりと見なされるようになった。Saskia Elisabeth Ziolkowski: The Ends of an Enpire: Pier Antonio Quarantotti Gambini's Il Cavallo Tripoli and Joseph Roth's Radetzkymarsch. In: Comparative Literature Studies, 52/2 (2015), S. 349-378, hier S. 369. 物語がトロッタ家の英雄的行為で始まるのはむしろその皮肉めいた暗示といえるだろう。

26)「カール・ヨーゼフにとってのオーストリアとは軍務においてのみ存在可能であるにもかかわらず，平和な時代の将校である彼にその可能性はない。」Sidney Rosenfeld: Grenze und Untergang in Joseph Roths Radetzkymarsch. In: Modern Austrian Literature, 2/3 (1969), S. 12-16, hier S. 13.

27) 作中では，ガリツィアの連隊が100周年記念を翌年に控えている。本来この連隊は帝国の治安維持や国防のため戦略的にガリツィアに配置され，あくまで帝国の政策を単にガリツィアの地

をはらんでおり，そのこと自体がオーストリア的であるといえる。

軍隊のオーストリア的性格は他の描写にも見られる。

> 町の北に兵舎があった。それは幅広く，よく手入れされた国道を遮断していた。赤煉瓦の建物の後ろで新たな命が始まっており，はるかな青き彼方へと通じていた。まるで兵舎がハプスブルク家の力の象徴として，オーストリア＝ハンガリー帝国軍によってこのスラヴ人の州へと置かれたかのようであった。何世紀もの間スラヴの諸種族が行き来することで幅を広げられた太古の国道さえも，この兵舎は遮っていたのだ。国道の方が兵舎を避けなければならなかった。（192）

Klarmann によれば，兵営はウィーンから離れた土地において異質な存在であり，決して田舎での営みに組み込まれることはない[28]。軍はどの土地にあってもよそ者である。どの土地の色にも染まらない軍の性格は多民族国家オーストリアの理念と一致しているように思われる。

しかし，軍もまたオーストリア国家と常に同一視されるわけではない。軍では本来違法である決闘が長らく行われており[29]，『ラデツキー行進曲』でも決闘による友人の死が，カール・ヨーゼフを大きく動かすことになる。また，作中の軍には音楽隊，軍医，弁護士，理髪師，極めつけに最高司令官としての皇帝など，様々な職業の人物が登場する。これは，国家の目的を遂行するための機関というより，それ自体の存続のためにあらゆる機能を備え，一つの社会を形作っていると形容した方が適当ではないだろうか。オーストリア帝国とはパラレルに存在するもう一つの国家と呼んでもよいかもしれない。オーストリア国家を体現しているように見え，オーストリア国家ではない。軍隊であるにもかかわらず，軍事的ではない。矛盾のモチーフはここにも存在している。

4.4. ジポーリエ

オーストリアを逆説的に象徴しているともいえるのがジポーリエである。この村は

で遂行しているだけのはずである。将校たちもこの土地の出身ではない。しかし，このような描写からは，連隊自体がアイデンティティを持っているかのような印象を受ける。

28) Klarmann, S. 153.

29) W.M. ジョンストン（井上修一［他］訳）『ウィーン精神：ハープスブルク帝国の思想と社会：1848-1938（1・2）』（みすず書房，1986 年），80 頁。

帝国の南の国境地帯にあるスロヴェニアの村にしてトロッタ家発祥の地である。ソルフェリーノの英雄ヨーゼフ（カール・ヨーゼフの祖父）の代以降，トロッタ家はスロヴェニア語を話さなくなる。その息子であるフランツはすでにオーストリア人としてのアイデンティティのみを持つようになっている。

> 郡長自身，自分の父親の故郷を見たいなどと望んだことはなかった。彼は一人のオーストリア人であり，ハプスブルク家の僕にして役人であり，彼の故郷とはウィーンにある皇帝の宮殿だった。……「運命によって，私たちは国境地帯の農民の一族からオーストリア人へとなった。私たちはオーストリア人のままでいたい。」（255f.）

ここから，オーストリア人とはスロヴェニア人を含む帝国の全住民のことではなく，それ自体が一つのナショナリティであるという郡長の考えが分かる。しかし，やはりオーストリアには民族的な根拠が欠けている。生まれながらのオーストリア人であり，そこにしかアイデンティティの拠り所がない息子のカール・ヨーゼフは父祖の地ジポーリエに憧れ続ける。

> ジポーリエ：その言葉には古い意味があった。今日のスロヴェニア人にすらもはやそんなことはほとんど知られていなかった。だが，カール・ヨーゼフはその村を知っているような気がした。……見知らぬ山々に囲まれ，見知らぬ太陽の黄金の輝きの下で，土と藁でできた粗末な小屋が立ち並ぶその村が横たわっていた。美しい村！すばらしい村！この村のためなら，将校としての経歴だって投げ出したことだろう！（193）

作中ではともかく，現実世界ではジポーリエは実在しない[30]。作中のスロヴェニアはシンボルとして機能しており[31]，その描写は必ずしも正確ではない[32]。いずれにしても

30) Johann Georg Lughofer / Jon Hughes: 'Österreich ist nicht in den Alpen zu finden': The Representation and Function of the Alps in the Work of Joseph Roth. In: Austrian Studies, 18 (2010), S. 57-73, hier S. 57.

31) Armin A. Wallas: Das Bild Sloweniens in der österreichischen Literatur: Anmerkungen zum Werk von Joseph Roth, Ingeborg Bachmann und Peter Handke. In: Acta Neophilologica, 24/1 (1991), S. 55-76, hier S. 56.

32) 例えば，そこにはモスクが想像されているが，1910 年の国勢調査によると，スロヴェニア人地域であるクライン（カルニオラ）公国の住民の 99%はカトリックである。調査項目にイスラム

カール・ヨーゼフはそれを実際に目にしたことはなく，彼の思い描くそれは実体のない空虚な村でしかない。また，カール・ヨーゼフが憧れる地として作者ロートがわざわざ架空の土地を設定したことはどこか示唆的である。メタレベルの視点を物語に持ち込むならば，カール・ヨーゼフは存在しない物に対して必死に想いを巡らせるという空しい努力をしていることになる[33)]。

他者の像は自らに対する解釈でもあり[34)]，ジポーリエはオーストリアを際立たせるためだけに登場する。しかし，ジポーリエは「オーストリアの裏返し」としての存在意義しか持たず，それ自身の本質はゼロに等しい。この村は，実態あるスロヴェニアではない。そして，このような架空の村によって際立たせられるオーストリアの本質も結局は曖昧で空虚なのである。それゆえに，カール・ヨーゼフはスラヴ性に「本当の自分」を見出そうとしている。オーストリアとジポーリエの関係は堂々巡りのようになる。両者とも自らを際立たせるために互いを必要としているが，そのどちらもが曖昧な存在であるために，結局は「相手」を拠り所にすることもできないのだ。

4.5. 皇帝

トロッタ家の人々に次いで重要な登場人物は皇帝である。ハプスブルク家の皇帝は帝国内の諸民族を束ねる存在であり，オーストリアの歴史はハプスブルク家とともに歩んできたと言っても過言ではない。まさにオーストリアとはハプスブルク皇帝と重なる存在である[35)]。だが，オーストリアとは単なるハプスブルクの言い換えにすぎないというわけでもない。

教は設定されておらず，「その他」扱いだが，クラインにおいてこの割合は 0 である。Vgl. K. K. Statistische Zentralkommision (Hrsg.): Österreichische Statistik. Neue Folge. 1. Bd. 2. Heft. Wien: Kaiserlich-Königliche Hof- und Staatsdruckerei 1914, S. 36.

33) 「想像上の故郷が見つかることはない。なぜなら，そのような故郷は存在しないし，したこともないからである。」Walls, S. 57.

34) Ebd. S. 55.

35) オーストリア帝国は1804年に神聖ローマ皇帝フランツ2世がオーストリア皇帝を名乗ったことで成立した。「この措置は選帝侯の意向と神聖ローマ帝国の帝国議会を無視していた」エーリヒ・ツェルナー（リンツビヒラ裕美訳）『オーストリア史』（彩流社，2000年），418頁。オーストリア帝国の成立はハプスブルク家の家政上の都合によるところが大きい。「この王朝にとって必要だったのは『皇帝への愛』であり，オーストリア国民などという概念は存在しなかった」。Seton-Watson, S. 147. 「『朕は国家なり』という言葉はルイ14世以上にフランツ・ヨーゼフにこそふさわしいものだった。」Friedrich F. G. Kleinwächter: Der Untergang der Oesterreichisch-ungarischen Monarchie. Leipzig: Koehler 1920, S. 107.

『ラデツキー行進曲』の中では，皇帝もまた孤独で，疎外された存在として描かれている。

> ハプスブルク家の偉大な黄金の太陽は沈み，世界の奈落で砕け散り，いくつもの小さな太陽に分解する。その小太陽は再び独立した天体として，独立した諸民族を照らさねばならないのだ。わしに統治されることが連中は全く気にくわないのだ！（352）

フランツ・ヨーゼフ皇帝は独白の場面が多く，周囲から孤立している様子が読み取れる。

また，皇帝は自らを一人のオーストリア人であると考えているが，同じく真のオーストリア人であるカール・ヨーゼフやホイニツイキとは必ずしもアイデンティティを共有しているわけではない。前者は皇帝の恩寵によってオーストリア人となった英雄の一族の子孫であるにもかかわらず，ジポーリエに想いを馳せ，オーストリアから解放されることを望んでいる[36)]。後者は皇帝について，思考力を欠いた老いぼれであるとすら発言している。皇帝の孤独さは，彼もまた属すべき祖国を持たない一人のオーストリア人であることを示している。

また，軍人としてのフランツ・ヨーゼフにも矛盾が存在する。

> 天幕の前で番をしているかもしれない最下級の兵士ですら，彼よりは強かった。彼の最下級の兵士ですら！そして彼は最高司令官なのだ！（345）

軍の頂点に立つ彼は最弱の軍人なのである。事実，彼の軍事的無能さ[37)]は作中に明確に描かれている。そもそもヨーゼフ・トロッタがソルフェリーノの戦いでフランツ・ヨーゼフの命を救ったのは，皇帝が双眼鏡で相手のイタリア軍をのぞいたために敵から目立ってしまい，あやうく銃で撃たれそうになるという失態を犯したからであった。第 15 章で閲兵した大演習についてはその意味を全く理解していない。第 3 節で述べ

36) 彼の祖父ヨーゼフは自らの行いが脚色された英雄譚として教科書に載っていることに幻滅し，軍を退役している。初代の時点でこの一族と皇帝の隔たりが示唆されている。Vgl. Jan T. Schlosser: Identitätsproblematik und Gesellschaftskritik. Zum Solferino-Kapitel in Joseph Roths Radetzkymarsch. In: Orbis Litterarum, 60 (2005), S. 183-201.

37) Ebd., S. 186.

た,「オーストリア的存在」ともいえる軍隊を代表する資格を，この大元帥は持っていないのである。そのような皇帝が果たしてオーストリアと完全に同義の存在なのだろうか。

史実では，カール・レンナーやアウレル・ポポヴィッチなどの法学者たちがオーストリア国家のあり方を巡って，自らの考えを表明した。彼らはハプスブルク家の皇帝による君主制の維持を主張したものの，それは皇帝に対する愛を意味してはいなかった。レンナーやポポヴィッチは帝国維持には尽力してもハプスブルク家そのものには不信感を持っていたのである[38)]。彼らにとって，皇帝は近代的な意味でのオーストリア国民に戴かれる存在でしかなく，皇帝がオーストリアを定義するわけではなかったのだ[39)]。何よりも，作者のロート自身も帝国崩壊後には社会民主主義者として活動していた時期がある。のちに旧帝国最後の皇太子オットー・フォン・ハプスブルクをオーストリアの君主として想定するようになるが，それは反ナチス的動機に由来するところが大きい[40)]。ロートはハプスブルクとオーストリアを必ずしも同一視していたわけではないのである。ロートのこの観点は，作中で周囲のオーストリア国民たちから孤立し，故郷を見失っているフランツ・ヨーゼフにも反映されている。

5. 終わりに

以上,『ラデツキー行進曲』には様々なオーストリア像が見られる。それらの諸要素は互いに矛盾し合っている[41)]。モラヴィアの例で言えば，ドイツ人の田舎町 W 市と,

38) ジョンストン，47 ページ。

39) ロートはエッセイ『ホテルの世界』で次のように述べている。「この哀れな連中には，近代的な資本の近くで一生を送りながら，一株式会社が自分たちの雇用主であると考え，……自分たちを自由に雇用したり解雇したり，これを命じたりあれを禁じたりする男を，同じように神秘に満ちた株式会社の雇われ人にすぎないと考えることは，なかなか骨の折れることかも知れない。こうした彼をパトロンと見なす方が遥かに簡単なのだ。」平田達治訳『放浪のユダヤ人とエッセイ二篇』（鳥影社，2009 年，139-186 頁），167 頁。皇帝もまた国家の一官吏でしかなく，国家の所有者ではないという考えをロートが持っていた可能性は否定できないだろう。彼に社会民主主義者としての側面があったことも考慮されるべきである。

40) Schlosser, S. 183f. また，ヴァルター・ベンヤミンは 1926 年 12 月 16 日の日記の中で，ロシアを訪れたロートについて言及を残している。「彼（筆者注：ロート）は（ほとんど）信念をもったボルシェヴィキとしてロシアにやって来たが，去るときは王政主義者だ，ということである」ヴァルター・ベンヤミン（藤川芳朗訳）『モスクワ日記』（晶文社，1982 年），50 頁。

41) ロートのこうしたオーストリア観は彼がユダヤ人であったことやそのユダヤ人観と関連があるだろう。『放浪のユダヤ人』でロートは次のように述べている。「ユダヤ人はほかのすべての民

その郊外に位置する軍の駐屯地は互いに相容れない様相を呈しているが，どちらもオーストリアを描いているように見える。また，それら各々の要素自体も矛盾を孕んだ存在だ。オーストリアとはこれら相反する要素をまとめ上げている上位概念ではない。なぜなら，オーストリアはすでに「分子レベル」で矛盾を抱えているからである。「分子」そのものが明確な存在でない以上，それらに共通性を見出し，アウフヘーベンすることもできない。そして，何によって矛盾が生み出されているのかを正確に理解することも困難である。仮に更なる分割を試みても，また矛盾したものが現れることだろう。分割してオーストリアを説明できない以上，オーストリアのオーストリア的性格は自己言及的な定義でしか説明できないのではないだろうか。オーストリアがまとまりを欠いた諸要素の寄せ集めのように見えるにもかかわらず，一枚岩のような存在にも感じられるのには，そのような理由があると考えられる[42)]。

これらのオーストリアの性質は単なる創作にとどまるものではない。帝国崩壊後のオーストリアを襲ったアイデンティティ危機は，そもそもオーストリアという存在が曖昧さや矛盾を含むものであったことの表れである。しかし，それは決してオーストリアの存在を否定するわけではない。オーストリアは確実に存在していた。それを裏付けるオーストリアの本質を本稿で解き明かすことはできない。だが，ロートが祖国についてこれほど豊かな記述をしていること自体，オーストリアの存在の証拠と言えよう。

族同様，一民族を成しているのか，それ以上でもそれ以下でもないのか，ユダヤ人は宗教的共同体なのか，人種的共同体なのか，それとも単に精神的統一体にすぎないのか，数千年の間，自己の宗教とヨーロッパにおける自己の特別な立場だけによって存続してきた民族を，その宗教とは無関係に「一民族」とみなすことが可能なのか」（114-115 頁）。

42) 『皇帝廟』では主人公が「多様なあり方とさまざまな来歴を持った風景や，田畑や，国民や，人種や，小屋や，そしてカフェーは，遠方に置かれたものを身近にもたらし，異質なものを親しい間柄にあるものとし，そして外見では互いに離反しようとするものを一致させることのできる，ある強力な精神のまったく自然な法則に服しているに違いないのだ，と。……その精神こそ，ズロトグロートにいようとも，ジポーリエやウィーンにいるのと同じように，自分の家郷にいるかのようにぼくに感じさせたものなのであった。」（48 頁）と語っている。一人称小説であるこの作品には，説明的な文章が多い。ロートの考えが直接的に投影されているといえよう。

Wo liegt Österreich als Heimat?

– Österreichbilder in Joseph Roths *Radetzkymarsch*

OBARA Morio

1918 zerfiel die Österreichisch-Ungarische Monarchie. Mit dem Aufschwung des Nationalismus war die Daseinsberechtigung dieser multinationalen Monarchie in Frage gestellt worden. Die Debatte über die Identität Österreichs und der Österreicher schwankte weiter in der Zwischenkriegszeit, was 1938 mit zum Anschluss an das Dritte Reich führte. Hatte Österreich an sich keine eigene Bedeutung? War es dann unmöglich für die Monarchie, einen Nationalstaat zu begründen, der auf einer 'österreichischen Nation' beruhte?

Joseph Roth war ein Schriftsteller, der sich Österreichs stark bewusst war. Man kann ihn einen 'wahren Österreicher' nennen. Er war Jude. Da die Juden in der Habsburgermonarchie sowohl von den Deutschen als auch von den Tschechen angegriffen wurden, erwarben sie ihre Identität als 'wahre Österreicher Österreichs', die zwischen den gegensätzlichen Nationalitäten vermittelten. Außerdem war Roth in Galizien, einem Grenzgebiet der Monarchie, geboren, während viele jener Juden, die in der Spätzeit der habsburgischen Monarchie und der Zwischenkriegszeit lebten, in Wien geboren waren. Das Österreichbild, das Roth malte, bezog sich nicht auf Wien. In seinem Hauptwerk *Radetzkymarsch* lässt sich das 'Österreich an sich' finden, das er spürte.

Der erste Teil des Romans spielt hauptsächlich in der Stadt W. in Mähren, die im tschechischsprachigen Gebiet liegt. Der Protagonist Leutnant Carl Joseph von Trotta dient in einer Garnison in dieser Gegend, und sein Vater Franz vertritt dort als Bezirkshauptmann den Kaiser. In dieser Stadt W. wird der Radetzkymarsch gespielt. Das weist darauf hin, dass die Herrschaft der Monarchie auch in diesem Gebiet ausgeübt wird. Auf der anderen Seite wurzelt Herr von Winternigg, ein Gutsbesitzer, in der lokalen Gesellschaft und übt seinen Einfluss unabhängig von den staatlichen Behörden aus. Er kommt schlecht mit dem Bezirkshauptmann zurecht und scheint der Autorität dieses Vertreters des Kaisers nicht zu

folgen. Die Landschaft dieser mährischen Stadt, wo man zwar den Einfluss der Monarchie betrachten kann, ist dennoch anders als die von Wien. Trotzdem hat die Stadt W. eine 'österreichische' Atmosphäre. Damit wird verdeutlicht, dass Österreich unabhängig vom Ort existieren kann.

Im zweiten Teil des Romans wechselt Carl Joseph von Trotta nach Galizien, das ganz im Nordosten der Monarchie liegt und an Russland grenzt. Das Österreichbild in Galizien unterscheidet sich von dem in Mähren. In dem Roman wird auf den ungewöhnlichen Anblick Galiziens Nachdruck gelegt. Die Dekadenz dieses Landes macht alles in dem Land „heimisch". In der außergewöhnlich verschlossenen Sphäre kann sogar die Armee, die in den verschiedenen Gebieten die Herrschaft der Monarchie verkörpert, eine Verwandlung nicht vermeiden. Andererseits hat das Land auch eine dynamische Ausdehnung. Hier wird weltweiter Handel getrieben. In diesem Grenzgebiet findet man das Gleichgewicht zwischen der Ausziehungs- und Zentrifugalkraft von Österreich. Galizien wurde im 18. Jh. in Österreich eingegliedert. Eben aus diesem Grund erwarb es gleichzeitig auch seine Eigenschaft als Grenzgebiet.

Nicht nur ethnische Elemente wie Nationalität, Sprache, Gebiet, sondern auch die Armee strukturieren die Monarchie. Das Militär ist auch ein wichtiges 'österreichisches' Wesen und hat innere Widersprüche. Auch in Österreich-Ungarn war es neben der Bürokratie eine Stütze des modernen Staates und symbolisierte die dynastische Herrschaft. Das wird im fünften Kapitel beschrieben, wo die Kaserne eine uralte slawische Landstraße „abschließt". Seit der zweiten Hälfte des 19. Jh. erntete die k. u. k. Armee immer weniger ausgezeichnete Erfolge. Die Schlacht von Solferino von 1859 brachte zwar den Trottas Ruhm als Heldengeschlecht, aber Österreich selbst verlor die Schlacht. Nach der Niederlage bei Königgrätz gegen Preußen im Jahre 1866 führte Österreich weniger Krieg. In dem Roman halten die Soldaten immer Manöver ab. In der Friedenszeit schwächt sich ihre militärische Bedeutung der Armee ab und ihr Dasein an sich ist schon Selbstzweck. Zur Armee gehören Menschen von verschiedenen Berufen wie Militärkapelle, Arzt, Advokat, Friseur und sogar der Kaiser als „Oberster Kriegsherr". Die Armee hat viele Funktionen und bildet einen parallelen Staat. Ihr Zweck ist eher ihr eigener Fortbestand als die Erhaltung der Monarchie. Sie scheint den österreichischen Staat zu verkörpern, aber die staatliche Macht auch zu verweigern. Daher ist sie eine unmilitärische Armee. Das Widerspruch-Motiv ist auch hier zu sehen.

Sipolje, ein slowenisches Dorf, das an der südlichen Grenze der Monarchie liegt und

aus dem die Trottas stammen, symbolisiert Österreichs Bi-Polarität. Joseph Trotta (Carl Josephs Großvater), der Held von Solferino, und seine Nachkommen können kein Slowenisch mehr sprechen. Franz, der Bezirkshauptmann, betrachtet sich nur als Österreicher. Im Gegensatz wünscht sich sein Sohn Carl Joseph Entfremdung von Österreich und sucht nach seiner Identität in Sipolje. Er besucht diese Heimat jedoch nicht. Seine Vorstellung ist bloß abstrakt. Sipolje ist ein fiktives Dorf, das Roth entwarf. Es erscheint nur, um Österreich auszuzeichnen, denn das Bild des Anderen ist zugleich Selbstinterpretation. Sipoljes Daseinsberechtigung ist nur 'Nicht-Österreich', deshalb ist sein Wesen fast null. Gleichfalls ist aber auch das Wesen Österreichs unklar und leer, weil es nur von einem solchen imaginären Dorf ausgezeichnet wird. Österreich und Sipolje brauchen einander für ihren Bestand. Da das Wesen der beiden jedoch unklar ist, kann sich eins nicht wirklich aufs 'andere' stützen.

Der habsburgische Kaiser ist neben den Trottas ein wichtiger Charakter. Er bindet die Nationalitäten innerhalb der Monarchie zusammen. Die Geschichte Österreichs entwickelte sich mit den Habsburgern. Österreich lässt sich mit dem Kaiser identifizieren. Er ist jedoch nicht Österreich an sich. Aus Monologen des Kaisers Franz Joseph liest man ab, dass er von seiner Umwelt isoliert ist. Im fünfzehnten Kapitel besucht er Manöver, versteht aber nichts von ihrem Sinn. Der Kaiser ist der Armee (des Symbols der österreichischen Herrschaft) am wenigsten würdig. Es ist also zweifelhaft, ob er bei Roth mit Österreich gleich ist.

In *Radetzkymarsch* lassen sich verschiedene Österreichbilder finden. Diese Elemente widersprechen einander. Österreich ist kein Oberbegriff, der sie aufhebt, denn Österreich enthält auch auf 'Molekularebene' Widersprüche. Es ist vergebens, die 'Moleküle' zu zersetzen, um ihr Wesen zu erfahren. Man wird nur neue Widersprüche entdecken. Österreich ist unteilbar, deshalb definiert es sich nur rekursiv. Daher erscheint Österreich einerseits als Mischung von uneinheitlichen Elementen, andererseits als ein Monolith. Diese Eigenschaften Österreichs sind nicht nur im Roman vorhanden. Damit wird die Identitätskrise Österreichs und der Österreicher nach dem Zusammenbruch der Monarchie bezeichnet. Die Existenz Österreichs wird aber nicht verneint. Die reichen Beschreibungen Österreichs in dem Roman belegen seine Existenz.